

「緑字企業報告書2013」に対する意見

金沢大学 人間社会学域 地域創造学類 環境共生コース 准教授
香坂 玲



和食 自然と文化と

「世界遺産」と聞いて読者の皆様は何を思い浮かべるでしょうか。最近では、富士山が世界遺産に登録をされたということで話題となりましたが、こちらは実は自然遺産ではなく、富士山とその信仰にまつわる伝統の面での文化遺産としての評価になっています。他にも口伝えの物語、歌舞伎、能楽が無形の遺産として登録されています。

いま、その無形の遺産として「和食」がその候補として議論されています。清酒、焼酎などの和酒、本みりんなどの調味料の供給を通じ、宝酒造も日本の食文化に深く関わってきました。同時に、日本食のグローバル化のなかで、世界の50カ国以上で宝製品を提供しているとあります(P.9参照)。国連や研究機関で北米、欧州に10年以上暮らした私も、寿司を筆頭に和食が広がっていることを実感してきました。また、日本を離れて、和食の土台にお酒や調味料があり、和食が日本の水、稲、そして木など自然とも深い関わりがあることを改めて実感しました。

自然遺産などでは遺産に指定されると、ブームとなり、一気に訪問客が増えて、綺麗であった自然が踏み荒らされたり、トイレ・駐車場などの施設の問題も出てきました。日本食でも海外に展開した際に似て非なる「日本食もどき」が増殖し、私もブロッコリーの入ったラーメンなどで面食らった体験をしてきました。和食が本物かどうかを監視するスシ・ポリス構想も検討され、評判を呼びました。自然も、和食も、世界遺産になった後にこそ、どのようにその品質を保持するのが問われていることに気づかされます。

なぜ 緑字企業報告書を毎年出しているのか

その品質を保持し、皆さんが安心できる形で提供できていると納得してもらうには、どのような仕組みがいいでしょうか。第一に、品質や環境負荷を正確に「知る」こと、「可視化」

や「見える化」が必要となります。健康状態でいえば、体重や血糖値を測定することに当たります。つまり、今、どれだけの量やエネルギーが使われているのか、どこからどのように材料は来ているのかを把握すること、なるべく数字に見えるようにする努力が必要となります。品質の情報入手、在庫管理、米のトレーサビリティ法にも対応した原産地表示が該当します(P.13参照)。原材料では残留農薬や放射能汚染のチェック、製造段階では清掃度別のゾーニング、出荷後も鮮度管理や製造履歴が実施されており、食の安全・安心へのこだわりを感じます(P.14参照)。

ただ、その努力は、一定の水準に達したからいいというものではないのです。そこで次に、事業者が、その把握された量や取り組みを「改善する」ステップとなります。個人の健康でいえば、運動回数や食生活を良くする努力です。事業では具体的には、温暖化ガス、エネルギー、ゴミであれば減らすことでしょうし、生態系への影響の回避や自然の再生が該当します。宝酒造では、「緑字」という概念を1998年に報告書に導入して以来、決算の黒字や赤字といった言い回しで企業が財務状況を改善するように、環境への取組の改善に取り組んでいます。

最後に、知り、改善した中身を、「伝えること」も大事になります。まず、製品のレベルでの話では、ラベル、説明書き、認証で、品質や機能を分かりやすく伝える必要があります。「食品衛生法に基づく添加物の表示等について」が一部改正され、消費者、社会の食品表示への関心が高まっている中、宝酒造では、調理機能の見える化(P.12参照)などが実施されています。次に事業レベルでは、環境やCSR報告書として、定期的に事業での活動を伝えること、それも、一回ではなく、毎年といった具合に定期的にすることが大事です。なぜならば、事業として継続して定期的に報告をすることで改善や社会とのつながりを保つことができます。個人であれば、毎日の体重、運動

の記録を取って伝えていく作業でしょうか。

こうしてみると、「緑字」というのは、従業員にも消費者や株主にも分かりやすい概念で、従業員には自社のことを知り、改善していくツールとして、消費者などには毎年定期的に、その取り組みの進捗状況を報告する仕組みとなっていることが分かります。大災害やエネルギー問題があっても、正直に報告を続けることが、消費者や社会と真剣に向き合う道です。

今年の報告書をどう読むか

一目で概要が分かる、2012年のISO14001 環境活動報告結果をご覧くださいませ(P.27参照)。生産部門でも物流部門でも、CO₂削減の目標達成にやや苦戦しています。品質の命綱ともいえる、生産部門用の水についても削減ではなく、9.4%の増加となっています。激動のエネルギー事情には、対応しきれていないことが読み取れます。それを定期的な情報公開を一貫して開示した活動には透明性を感じますし、一定の評価もできます。更に、緑字決算では、「はかり売り」の新規開拓、エコ提案の件数など、明るい兆しも読み取ります。

今後は、決算で見えた課題にどのように対処を考えているのか、電力事情が不透明なりに議論を深めていただきたいです。それが容易ではないことは理解していますが、企業理念にもあるように「ユニークな発想で、摩擦を恐れずに議論」をしていただき、そのプロセスで何度も「なぜ」と問いかけ、エネルギー面での変革を期待します。

最後に、私が本報告書で高く評価しているのは、人づくりの手を休めていないことです。自然保護と空容器という、本業の川上にあたる原料と、川下で出口となるリサイクルの問題の教育や環境活動に取り組むなかで、長期的に最も重要な、次世代の子どもを育成する、ということも地道ながら非常に重要な活動です。小学校の地場産業学習の受け入れ、田んぼの学校、インターンシップは、各年齢に応じて、どれも重要な活動です。タカラ・ハーモニストファンドは、数多くの活動や研究を支援してきました。遠回りのようでいて、宝酒造は原料となる水、米、などが自然との共生が本業に不可欠であること、その土台が人づくりにあることを感じさせます。ちょうど来年2014年は、持続可能な開発のための教育(ESD)の10年の最終年に当たり、岡山と名古屋において最終年の会議も予定されています。来年も、本業の製品や事業と、そして人づくりの緑字決算を楽しみにしています。

表紙について

この写真は、当社の主催する社会・環境プログラム「宝酒造田んぼの学校」<草取り編>で撮影されたもので、参加されたお子さんが田んぼの中で見つけたおたまじゃくしを見せているところで



です。私たちは、このいきいきとした表情から、「皆様いきいきをお届けできる企業」であり続けたいという当社の想いがより伝わると考え、表紙写真に選定しました。

編集後記

本報告書では、一企業市民として、社会のさまざまなステークホルダーの皆様とのかかわりをご報告しています。

本年度の特集では、「日本の食文化を支えて～宝酒造の和酒、和の調味料～」と題して、近年国内外で注目を集めている日本の食文化について、当社のかかわりを紹介するとともに、おいしさや品質へのこだわりや消費者の方々の関心が高い安全・安心への取り組みについても説明しています。

当社のCSR(企業の社会的責任)の取り組みに関しては、本報告書以外に当社のホームページにより詳しい情報を掲載しています。合わせてご覧いただければ幸いです。

今後もよりよい活動を進めていくために、皆様方からの当社の企業活動、環境活動に対するご意見をお待ちしています。よろしくご意見申し上げます。

編集体制

- ・編集委員会(広報部門、環境部門、総務部門、人事部門、事業管理部門、営業部門、商品開発・宣伝部門、購買・製造部門、海外事業部門、品質保証部門、お客様相談部門、宝ホールディングス株式会社IR部門計15名)
- ・編集責任者:中尾雅幸(環境課長)

発行責任者:木下勝仁(環境広報部長)